

Torg JS, Vegso JJ, Torg E

大島 襄 監訳, 青木治人・大橋正洋・河野照茂 訳

スポーツ外傷・障害のリハビリテーション

(B 5 判 264 頁 5,665 円 (税込) 1990 年 医学書院 刊)

黒田 善雄

(順天堂大学理事)

JS Torg らの共著“スポーツ外傷のリハビリテーション—運動療法図説”が、大島 襄監訳により“スポーツ外傷・障害のリハビリテーション”という書名で翻訳出版された。Torg らがその序文で述べているように、かつてはスポーツ選手といえば競技スポーツの一握りのスター選手を指していたが、今では、スポーツはレクリエーショナルなスポーツを含めて、国民の大半の人々が参加しており、多くの人々が自分のことをスポーツ選手と考えている。

わが国でも、幼児から 80 歳を超える高齢者までが、いろいろなスポーツ活動に参加している。その結果、スポーツのやり方を間違えたり、熱心の余りオーバユースになったりして、いろいろなスポーツ外傷に悩む人も増加している。

多くのスポーツ外傷の専門医た

ちの中には、未だに「切ることは治すことである」と考える人が多い。しかし、スポーツ外傷の治療で一番重要なのは、適切なリハビリテーションと、運動療法であるというのが著者らの主張である。大部分のスポーツ外傷は温熱と冷却、安静と運動の適切なバランスを考えた組み合わせで良くなり、特に外傷の急性期には冷却と安静が有効であり、亜急性期には温熱と運動の適用が効果的であるとしている。勿論、スポーツ外傷の治療に適切な薬物療法や装具、そして手術療法などが必要なケースも多いが、スポーツ外傷から、一日も早く再びスポーツ活動の現場に選手として、あるいは愛好家として戻るために、もっとも重要なのは運動療法を中心としたリハビリテーションであると述べている。

受傷後あるいは手術後のリハビ

リテーションとしての運動療法の原理は関節可動域の拡大、筋力増強、心肺系有酸素能力の増強であり、今も昔も大きな変化はない。いたずらに新しいトレーニング器械にまどわされることなく、その方法をよく理解し、運動療法の目的に合わせて活用することが重要である。

本書は以上のような基本的コンセプトのもとに、足部、足関節、下腿部、膝関節、股関節、腰部、肩関節、頸部、肘関節、手関節、手の各部においてよくみられるスポーツ外傷について、その発生メカニズム、症状、初期治療、リハビリテーション、装具などについて解説している。

スポーツ外傷後の、あるいはその術後から現場復帰までのリハビリテーションは、マンパワー、プログラム、装具、施設を含めて、システム全体がわが国ではもっとも遅れた領域であり、一日も早くその確立が望まれている。

本書はそのために大いに役立つものであると思われる。